ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～

この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない。

これは、「希望の国のエクソダス」（村上　龍著）に出てくる有名なフレーズです。気候変動問題をはじめとした地球環境の危機やコロナ禍、ウクライナ侵攻、身近な格差や社会保障の問題などを考えると、どうしても明るい未来や希望を語り、将来への展望をもつことが難しい時代となってきました。

だからと言って、今のままで良いとは当然ながら思っていません。まして、希望は与えられるものではなく自分で創り出すものです。さらに言えば、希望とはもつべきかもたざるべきかで考えるのではなく、困難が連続する社会の中で生き抜くためにどうしても求めてしまうものです。

それに、２年前のことですが、コロナ禍のマスク対応施策で注目を集めた、台湾のオードリー・タン氏のインタビュー記事に、カナダのシンガーソングライター「レナード・コーエン」の「Anthem(聖歌)」の一節が紹介されていました。

Ring the bells that still can ring	まだ鳴る鐘を鳴らせ
Forget your perfect offering	完璧にすることはやめろ
There is a crack in everything	すべての物にはヒビがある
That’s how the light gets in.	だから光が差し込むのだ

「すべての物にはヒビがある／だから光が差し込むのだ」とは、全てのものに潜む可能性を示唆していて、希望に溢れたメッセージです。そして、この言葉にどれほど勇気付けられたことでしょう。後ろ向きのエネルギーを少しでもプラスにしていかなくてはもったいないと。

最近久し振りに見直した映画に「もののけ姫」があります。この映画は、ジブリ作品の中でも珍しく、描こうとする対立軸が多過ぎて、ついうっかりしていると迷子になってしまう作品です。しかし、１つ１つのもつれた糸を、その背景を想像しながらほぐしていくと、謎解きゲームのような楽しさを内包している稀有な作品でもあります。その意味では、もっとスピンオフが生まれても良かったのかもしれません。その意味では、タレントの中田敦彦が裏設定や独創的な解釈を YouTube で詳しく熱く説明していますから、一度覗いてみると良いでしょう。「目からのうろこ」の、面白い体験ができると思います。

前振りが長くなりましたが、この映画の中でアシタカがモロに向かって答えた台詞が心に響きます。あの有名なカウンターテナーの名曲が流れた次のシーンです。

（山犬モロ）　「お前にサンは救えるか。」
（アシタカ）　「わからぬ。だが、共に生きることはできる。」

この作品の大きな柱の１つが、サンとアシタカのラブストーリーです。だとすれば、主人公としては「私なら救える。」と見得を切っても良かったし、そういう気分にもなれるのが恋愛の良さでしょう。しかし、そうは言わなかった。いや、むしろ「わからない」と言い切ることで、逆に精神的な強靭さを感じました。安っぽい言い方を借りれば、ＳＤＧｓの思想とも繋がっていると言えるでしょうか。

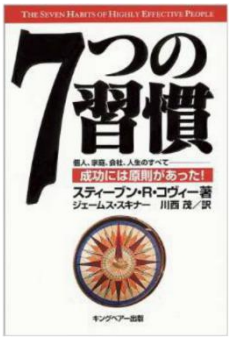
それはともかく、考えてみれば、私たちは、なんでもかんでも明快な答えを求めようとしがちです。

しかし、現実には曖昧であやふや、矛盾に満ちているのが当たり前です。それなのに、明確な回答を期待するが故に、そこに生きづらさが生まれているのです。その典型に、誰もが死ぬことは分かっていながら、それがいつのことなのか誰も分からないという事実が挙げられるのではないでしょうか。そこに不安が生まれるから、先回りしていろいろ知ろうとし、だから、苦しむのです。むしろ、わからないからこそ人生であり、わかってしまっては、人生という旅を楽しむことはできないと達観することで、得られるものは大きいとも言えるのです。

と同時に、アシタカの言葉から感じる説得力や誠実さは、希望を語るには不確実性をしっかりと受け止めることがスタートラインなんだと認識させてくれます。換言すれば、分かっていないことを知ることで、初めて新しい発想や、それにもとづく行動が生まれてくるということです。

ここで、希望という、前向きに生きるための果実を獲得するために成すべきことという意味で、スティーブン・Ｒ・コヴィー著「７つの習慣」にも触れておきたいと思います。その中に、

「真の成功を達成し、永続的な幸福を手に入れるためには、謙虚・誠実・勇気・忍耐・勤勉などの原理原則を体得し、自分自身の人格に深く内面化する以外に方法はない。」



という言葉が出てきます。

分かり易い事例が紹介されていました。私たちがリンゴの樹を見たとき、幹や枝葉、さらに時期によっては果実が目に映ります。しかし、目には見えない地下に根があることを忘れてはいけません。昔からよく言われていることですが、根と枝葉は鏡のような存在です。と言いますのは、根の広さと同じだけ枝葉が広がるそうです。ということは、逆に言えば、枝葉を広げて多くのリンゴを実らせるためには、まず地下に根を広げる必要があるということになります。

私たちの人格や人間性は、取り出して測ることができませんし、目にも見えませんから、樹木で言う根のようなものです。そして、この目には見えない人格や人間性の大きさ、深さこそが、人生の豊かな実りをもたらすのだと言っているのです。

今の世の中、「目に見える部分」、つまり「どんな花を咲かせたか」「いくつ実をならせたか」ばかりが注目されがちです。ついつい他人と自分の花や実を比較して、焦ってしまうこともあるでしょう。そんなときこそ、「目には見えない部分」つまり「根っこ」に意識をフォーカスすることで、地に足が着いた生き方ができると思います。そして、その「目には見えない部分」を、私たちは希望と呼んでいるのではないでしょうか。

飛び立とう　朝日に向かって
爽やかな風を　体に受けて
飛び立とう　青空に輝く
明日の希望が　僕らを誘うよ

太陽が昇りくる　あふれる胸の叫び
僕らは青空に　今　吸い込まれて行く

個人的なことですが、まだ若く、熱い思いで体が満たされていた時代、当時最も好きだった曲が、この「離陸準備完了」でした。特に「今　吸い込まれて行く」の部分、「今」に続く４拍の間（ま）に蕩けるほどの心地よさを感じていました。まさに「sound of silence」です。聞き直してみると、再びその感覚が戻ってくるようです。いや、今だからこそ感じ取れる、新たな何かを呼び込みたいとの欲求がむくむくと頭をもたげてきます。それは、チェンジ（ｃｈａｎｇｅ）に、みんな（ａｌｌ）を加えると、挑戦（ｃｈａｌｌｅｎｇｅ）になるように、まずは、これまでの自分を少しでも変えようとしなくては何も始まらないよと優しく諭されているようでもあります。改めて、日々、「いつだって離陸準備完了」の緊張感を忘れないで生きていかなくてはとの思いを強くしました。とともに、アシタカの名台詞「生きろ！ そなたは美しい」が心の中で蘇ってきます。希望をもてない、今の自分へと叱咤として。（終）

ちょっとそこまで
～お散歩日和（地域編）～

平成３年（１９９１年）に当時の都営１２号線が練馬駅まで開通するまで、都心に通うには有楽町線の平和台駅を使う人が多かったように記憶しています。その時に利用したのが田柄通りを行き来するバスで、夜遅くなっても、平和台駅前のバス停にはいつも長い列ができていました。田柄通りとは、上図に記したように、光が丘から平和台までのバス通りのことです。その距離わずか２ｋｍほどで、歩いても３０分なので、バスを使わずに深夜歩いたことも一度や二度ではありません。

田柄地区を横断しているから付けられた名称だと思いますが、その田柄の由来ははっきりしません。

今ではすっかりバスの利用者は減り、注目する人はほとんどいないと思いますが、今回はその街路樹が少しだけ珍しいので触れてみたいと思います。

ここの街路樹は２種類です。まず、光が丘から市原医院（田柄１丁目）辺りまでがナンキンハゼです。

日本では古くからハゼノキ（ウルシの仲間）からロウを採取して和ろうそくを作っていました。しかし、江戸時代に中国からこの木が伝わり、「ハゼと同じように蝋が採取できる中国の木」という意味合いでナンキンハゼと命名されたと言います。

他に、紅葉が埴輪の色に似ているため、埴輪を作る埴師（はにし）にちなんで命名されたという説もありますが、前者の方が筋道に無理がないように思います。

ちょうど今、開花時期なの、この街路樹で花を探したのですが、１本も見付かりませんでした。剪定のせいなのか、樹齢が関係しているのか、それとも環境なのか、理由はよく分かりません。

ここで、実について触れましょう。熟すと黒い皮が割れ、白いロウに覆われた種子だけが枝に残ります。このロウの部分は高カロリーの脂質を多く含んでいるため、ムクドリなどの野鳥が好んで食べます。が、中の種子部分は有毒なので食べ残し、それでナンキンハゼは種子散布をすることができるという仕組みです。うまくできたものです。ちなみに、この木は漆の仲間ではないので、幹に触ってもかぶれることはありません。

そして、その先（春日町２丁目）から東側約２００ｍほどがハクウンボクです。

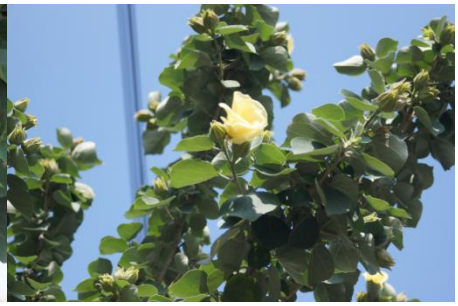
ちょうど今、そのハクウンボクにはたくさんの実が成っています。この実からもロウが取れ、かつてロウソクが作られていた時代がありましたから、奇しくも田柄通りの街路樹はロウソク繋がりということになります。それに、紅葉がどちらも美しいという共通点がありますから、秋の景色が楽しみです。

ここで愉快なことがもう１つあるので、紹介しましょう。

それは、水野整形外科医院（田柄中隣り）の真向かいに、１本だけハマボウがあることです。海辺によく咲く花なので、「浜の朴木（ホウノキ）」から「ハマボウ」と名付けられたと言われています。でも、だからこそどうしてこんな場所にという違和感を強く感じます。どういう経緯を経て現在に至っているのか、神秘的でさえあります。

これは全くの私の想像ですが、道路拡張前から庭に植えられていたものを、珍しいからとそのまま街路樹に転用したのではないかと思っています。もしも出会う機会があれば、元地主に尋ねてみたいものだと思っています。

その木が、夏の盛りに連日黄色い花を咲かせています。これは１日花なので、毎朝咲いては、毎夕散ってしまいます。その散り方がまた潔く、まるでツバキのように丸ごと落ちています。花びらの色も、落下とともに黄色から夕焼け色に染まるので、何か物語を感じさせます。



街の風景に欠かせないのが街路樹です。が、なかなかそこに目が行かないのも事実です。でも、じっくり観察することで、思いも寄らない気付きや発見に触れることができ、その結果、心にささやかな潤いがもたらされます。ちょっとだけ、いつもと違う目線を向けてみてはいかがでしょうか。

（終）

ちょっとそこまで
～お散歩日和（植物編）～

光が丘区民センター前のロータリーの中央に、巨大なシンボルツリーとして聳え立っているのがヒマラヤスギです。

当団地内ではありませんが、隣接してよく見かける風景なので触れておきたくなったという次第です。

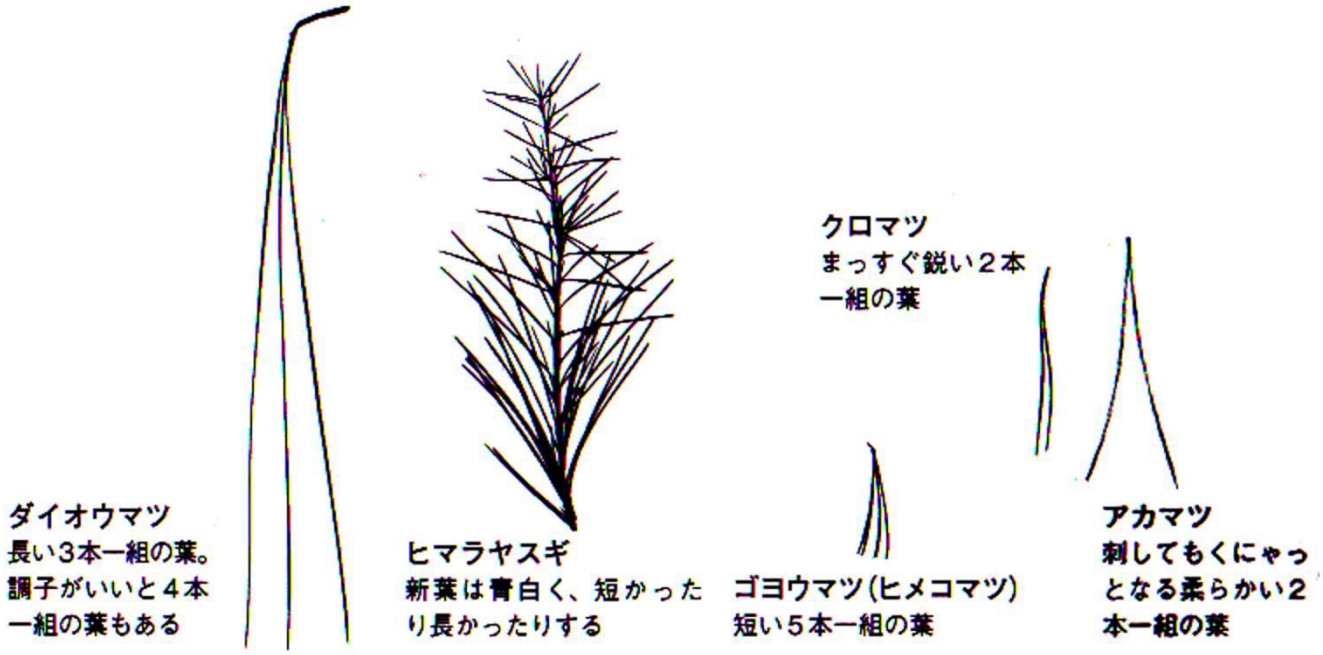
ヒマラヤスギという名前に、誰もが騙されるのですが、マツの仲間です。

これについては、また近いうちに触れようと思っているのですが、光が丘公園のバードサンクチュアリに隣接している鑑賞池（けやき広場）をぐるり囲っている樹木の名前を「落羽松（ラクウショウ）」と言います。四季の香公園で見事な景観を形成しているメタセコイヤに似ている木です。この木の名前に「松（マツ）」と付いてはいますが、こちらはスギの仲間です。「ヒマラヤスギはマツで、ラクウショウはスギ」と、対にして覚えると面白いと思うので敢えて触れました。

さて、ヒマラヤスギに話を戻します。

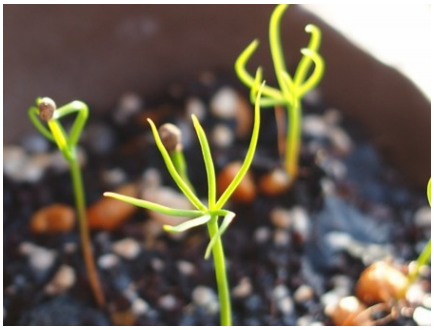
この木がマツの仲間であることは、その針状の葉の形状を見れば、スギよりもマツに近いことが分かります。原産地はヒマラヤの２０００m級の高地だそうで、ヒンドゥー教では、聖なる樹木として崇められていると聞きますが、その威容から考えて無理からぬところです。

ちなみに、マツの葉の数ですが、簡単に言えば、２・３・５本の３種類です。身近なアカマツやクロマツは２本で、５本あると五葉松（ゴヨウマツ）となります。３本あれば、北米原産のマツだとなります。しかし、ここでもヒマラヤスギは個性を発揮します。本数が定まらず複数が輪状に生えています。



ついでに触れると、このマツの子葉もユニークです。一般的に種子植物は双子葉植物と単子葉植物に

分かれていることはご存知の通りですが、マツのような裸子植物の場合、多子葉植物と言って、子葉の数が２～２４まで種類によっても固体によってもさまざまで、そう単純ではありません。



ヒマラヤスギがマツの仲間である理由として、もう１つ挙げたいことがあります。

ちょうど今、このヒマラヤスギに「もののけ姫」に登場する「こだま」たちがずらりと出現しているのをご存知でしょうか。

種明かしをすると、ヒマラヤスギの松ぼっくりです。秋に落下すると、素敵な「シダーローズ」が見られます。

ということで、光が丘公園の芝生広場をお勧めします。広場に北側は完全にヒマラヤスギの森と化しています。その下の四阿（あずまや）にはいつも将棋好きが集って縁台将棋を繰り広げていますが、どの木にも巨大な松ぼっくりがたわわに実っています。

今年の秋は、シダーローズ狙いで、ちょっと芝生広場まで足を延ばしてみてはいかがでしょうか。

（終）

編集後記

連日、炎天下ながら草むしりに励んでいます。鬱蒼とプランターや花壇、生け垣の根元などに繁茂している雑草をただがむしゃらにむしり続けます。気付くと目の前が丸裸。この光景を見ながら思い出したのが、八木重吉の詩「草をむしる」です。

草をむしれば／あたりがかるくなってくる
わたしが／草をむしっているだけになってくる

たったこれだけの４行詩です。意味もよく分かりません。摩訶不思議な世界観の詩です。

それまで野草たちがせっせと元気におしゃべりしていたのに、私が意味なく立ち入って遮断してしまったのです。だから、私はそこで一人ぽつんと取り残された感じがしたのでしょう。それに、草むしりは、やっているうちに草をむしることだけが目的になってきて、そのことに気付かされると、妙に軽薄な自分が見えてくるものです。

本当はもっと違ったことを訴えているのかも知れませんが、これが私流の解釈です。

草取りを巡っては、入江相政氏が「宮中侍従物語」に、昭和天皇から

「雑草という草はないんですよ。どの植物にも名前があって、それぞれ自分の好きな場所を選んで生を営んでいるんです。人間の一方的な考えで、これを切って掃除してはいけません。」

と叱られたというエピソードを書いています。

有名な美談として語られていますが、一度も炎天下に草取りをした体験がないから、そんな美しい言葉が吐けるのです。「命を大切に」と言いながらステーキを食っているような、「戦争反対」を訴えながらシューティング・ゲームに興じているような、そんな矛盾や不合理、浅薄さ、そして、腹立たしさを自分自身にも感じつつ、今日もまたせっせと草むしりに勤しんでいます。（タコヤキマン）